

問題・解答
用紙番号

32

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部・学科〉

3科目型 受験者

理工学部（生命科学科）、看護学部、農学部〔注〕文系科目型を除く

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

次の1～5の傍線部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。（一〇点）

- 1 貴重な歴史資料をフンシツした。
- 2 議論に値しない意見だとイツシユウする。
- 3 ギフンに駆られて行動を起こす。
- 4 領海シンパンに厳しく抗議する。
- 5 次回作のコウソウを練る。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

現在、わたしたちは新自由主義社会の中で、自分の好きなように生きる自由が保障される一方で、その自分の選択の結果を一身に引き受けなければならないという、自己責任化した社会の中を生きています。

そのように自分で自分の身を成り立たせていく生き方というのは、孤立した生き方にもつながっています。それは、自由でありながらも孤独で、よりどころや居場所を感じづらいものです。そういった孤立化・自己責任化した社会の在り方に対して、居場所という言葉は、孤独や不安にさいなまれることなく居場所を実感しながら生きていきたいという人びとの思いを反映し、「このような社会の在り方はおかしいのではないのか」という I としても存在しているのではないかと考えられます。

^A 居場所^Aについては、心理学・教育学・社会学・精神分析学など様々な学問領域で論じられていますが、居場所の定義として現在もっともよくつかわれているのは社会教育学者の萩原建次郎の定義です。

- ① 居場所は「自分」という存在感と共にある。
- ② 居場所は自分と他者との相互承認というかわりにおいて生まれる。
- ③ そのとき生きられた身体としての自分は、他者・事柄・物へと相互浸透的に伸び広がっていく。
- ④ 同時にそれは世界（他者・事柄・物）の中での位置感覚の獲得であるとともに、人生の方向の生成でもある。

萩原が提示しているような居場所の定義は、心理的な意味合いが強く付与された、まさに現代的なものといえるでしょう。

次に、その他の居場所の語られ方についても、概観していきたいと思います。わたしは以前に居場所をめぐる、理論的枠組みと類型を整理したことがあるのですが、それをもとにして居場所という概念を検討していきましょう。

^B 居場所を定義するための理論的枠組みとしては、おおよそ①主観／客観的承認、②他者との関係性の有無、③空間性の有無が大きな整理軸となっています。

①の主観／客観的承認とは、ある場所を、本人が主観的に居場所として承認するか、あるいは第三者が客観的にその人が居るべき場所だと承認するか、という軸です。前者は主観的居場所、後者は客観的居場所、と表現することができるよう。たとえば、自宅の自分の部屋が一番落ち着くという人にとっては、その場所はその人にとっての主観的居場所だといえます。その他にもいきつけの喫茶店が落ち着くという人にとっては喫茶店が、学校が大好きだという人にとっては学校が主

観的居場所といえます。それに対して、客観的居場所とは、第三者が客観的にその人がそこに居ることを承認するような居場所をさします。学生にとっての学校、会社員にとっての会社は、その人がその場所に居るためのメンバーシップが客観的に保障されているという意味で、それぞれ客観的居場所といえます。

②他者との関係性の有無は、他者と関係があることによって居場所となる場合と、他者との関係がないからこそ居場所となる場合とを両極とした整理軸です。学校の部活・サークルやクラスは、他者との関係性があるからこそ居場所になる場合の典型といえます。それに対し、学校や会社から帰り自分の家や自室に戻ってくるなどかほつとする、というような場合は、他者との関係性がない、あるいは希薄だからこそ、その場所が居場所となる例といえます。他者との関係性があることは、それによって、自分の存在を承認され、Ⅱを確認することができるというメリットをもちます。ですが、いいところだけでなくそれは同時になんらかの緊張感を自分に強いる側面ももつため、人は他者との関係のない居場所を同時にもつことによって、緊張と弛緩の両方を実現できるといえるでしょう。

③空間性の有無とは、ある人にとっての居場所が物理的空間をもつかどうかという整理軸です。居場所は学校や自宅のように物理的空間をもつものに限定されるものではありません。友人関係などは、たとえば学生時代は学校をねじろにし、卒業後は喫茶店や互いの家で会うなど、必ずしも特定の空間に規定されるものではありません。メールや電話でやりとりすることもあるでしょう。SNSなどのインターネット空間を居場所にするという例も珍しくありません。

ところで、③空間性の有無についてですが、こちらは21世紀の現代^Cとなつてはなかなか複雑な部分をもっています。これまで居場所の例としてあげてきた、学校・会社、自分の家・部屋などはすべて物理的な空間をもっています。それに対して、空間性をもたない居場所の例としては、(場所に紐づけられない)人間関係、インターネット空間やSNSといったオンライン上の空間や、本や空想の世界があげられます。

家族や友人関係は、しばしば家や学校という具体的な物理的空間を超えて、人が自分を承認したり、がんばり続けるためのよりどころとなっています。「○○ががんばってるから、自分もがんばる」などと、がんばっている友人を支えにして、受験や部活や仕事がしんどい時に自分を鼓舞したことがある人は少なくないでしょう。そう思えるような存在は、その人にとっての居場所といえます。

本やマンガ、ゲームなどに自分の居場所を見出す人もいます。本やマンガ、ゲームに没頭している時には、現実のわずらわしさや自分のことを忘れて、その世界に入り込み、くつろぎつつもののびと自分を解放することができ、そこに居場所を見出すことがあります。それらを味わい、鑑賞する側ではなく、自分が描く側となつてその世界を居場所とすることもあります。たとえば、

『アンネの日記』^Dは、少女アンネ・フランクが空想上の友人キティに向けて手紙を書くような形式で日記をつづっていますが、アンネにとっては日記や空想上の友人キティが、自分の気持ちを吐露することのできる居場所となっていたといえます。この日記は、ユダヤ系ドイツ人のアンネ・フランクが、第二次世界大戦中の1942年からナチスによって連行される1944年までの2年間、オランダ・アムステルダムでの日々をつづったものです。ユダヤ人である自分たちの存在に気づかれないよう、息を殺して生活していたアンネにとって、日記は唯一自由に自分を表現することのできる居場所だったといえるでしょう。アンネ・フランクほどなくとも、家庭や学校や仕事で居場所がないと感じている時、空想の中に自分の居場所を見出したことのある人はいるのではないのでしょうか。

また、空間性をもたない居場所を考える時に現在欠かせないのは、TwitterやInstagram^E、Facebook（2000年代であればmixiも中にはいるでしょう）、note、YouTubeといったSNSです。SNSだけでなく、オンラインゲームや掲示板やまとめサイトなども、空間性をもたないけれども、人びと（特に若者）の日常を構成する重要な居場所となっているようです。

Twitterのことを話していた時に、ある学生が、複数のアカウント（いわゆる「複数」とか「裏垢」といわれるものですね）を使い分けながら、「息をするようにつぶやいている」と言い、そのツイートに対する♡（いいね）やリツイートなどの反応で自分を確認している、と話していたことがあります。

別の若者は、オンラインゲームに夢中になって、オンライン上で知り合った仲間と毎晩ゲーム上で待ち合わせ、朝4時までゲームをしていました。オンライン上ではハンドルネームを使い、なりたい自分を実現したり、現実世界とは異なる人間関係をもつことで、その場が居場所となっていくのです。

実際には、学校や会社、地域での人間関係は、オンライン上にもつながっているのですが、居場所を空間性の有無できれいに切り分けて整理することはできません。物理的には限られた時間しか一緒にいられなくても、SNSで友人や恋人とつながっている感覚を確認することは日常におこなわれていることです。メタバースやVR（バーチャルリアリティ）も現実味を帯びてきて、異なる場所にいる者同士が、空間性と身体性を感じながら時間を共有することが日常的になる日も遠くないかもしれません。そのような状況において、現在では空間性の有無やリアル／非リアルの線引きというのも曖昧になっています。ですが、身体をもつ人間として、やはりその身のおきどころとしての空間の有無は今後も居場所を考える重要な枠組みのひとつであり続けるでしょう。

^E都市社会学においては、空間はファーストプレイス・セカンドプレイス・サードプレイスという3つの空間によって整理されています。ファーストプレイスというのは家庭や家族を指し、セカンドプレイスは職場や学校など、日中そこで活動に従事することで報酬や知識が得られる生産的な場

のことを指します。家庭や家族が帰っていく場所だとしたら、セカンドプレイスは日常的に行く場所、通う場所となります。

それに対してサードプレイスは、家でも職場でも学校でもないようなインフォーマルな公共の集いの場や地域などを指すものとして考えられています。

サードプレイスにおける居場所づくりが話題にされるようになってきた背景には、これまで強い影響力をもっていたファーストプレイスである家庭やセカンドプレイスである職場や学校が不安定なものになっている中で、あらためて地域社会や公共の場の役割に注目が集まるようになっていくという点が考えられます。

産業構造が転換して、職住分離と地域人口の移動が進んできた結果、地域社会のつながりが弱まり、私事化が進展していきました。それと同時にファーストプレイスとしての家庭やセカンドプレイスである学校（大人の場合であれば会社）の影響力が強まっていき、サードプレイスとしての地域の存在感は薄まっていきました。

人びとは地域コミュニティでのインフォーマルな社交の時間を削り、自分や家族に時間を費やすようになったものの、その結果、社会的なつながりを減少させ、それと同時に社会関係資本も減少させ、人びとの生活は閉鎖的なものになっていきました。地域コミュニティでの社交の時間を減らした分、家族や職場での絆が強まったかといえれば必ずしもそうとはいえず、そもそも新たに家族形成をしない人が増え、家族の不安定性は増し、職場でも（仕事のために割く時間は増えても）持続的な社会的つながりは形成されなくなっていました（たとえば社員旅行で家族ぐるみの交流をするなどは、今ではめっきり減った文化です）。人びとの生活は以前より孤独で不安定なものになり、社会の分断が進み、連帯はより困難になっています。地域コミュニティでのインフォーマルなつながりが、社会的つながりを維持し、民主主義的な社会をつくることに役立っていたのであり、一見無用にも見える地域コミュニティでのインフォーマルな社交がもたらす効用は非常に大きいものだったのです。サードプレイスでの社交は、家庭と職場の往復では出会えないような多様な人との出会いを可能にします。そして、人びとの生活を新鮮さにみちたものにし、心の健康を維持して、元気を回復させ、友だちをつくったり、楽しい人生を送ることをサポートしてくれます。

現代社会が、ともすると人を孤立においやるような傾向をもつからこそ、地域コミュニティの中に居場所をもつことの重要性が認識され、サードプレイスに注目が集まるようになったのです。

現実には、家族主義、仕事の多忙化、地域コミュニティの衰退は現在も進行しており、子どもが接する社会は家庭（私的な社会）と学校（公的な社会）に集中しているのが実態です。その結果、子どもにとって学校が唯一の公的な居場所になる確率が高まり、「過剰居場所化」していくリスクを伴うようになりました。

「過剰居場所化」とは、ある場所を客観的（物理的・時間的・メンバーシップ性）にも、主観的

にも唯一の居場所とするあまり、その場に対して過剰に依存度が高くなる状態を意味します。複数の居場所をもっている場合には、それぞれの場所がもつ拘束力（「居なくてはならない」性）や影響力は弱まります。しかし、特定の場の拘束力が強まると、その場からの退出可能性がせばまってきます。その場が居場所である状況を維持するために、物理的にも心理的にもエネルギーが割かれ、他の居場所を獲得・維持する余裕がなくなっていくのです。その結果、複数の多様な居場所をもつことが難しくなると、一人の人がもつことのできる居場所が数的に過少になっていきます。そして、居場所の数が少ないために、今ある居場所を維持しようと、その居場所に没入していくサイクルにはまりこんでいくのです。

このような居場所の「過剰」と「過少」は、居場所の選択肢^Fを少なくします。そして、ある場が居場所でなくなった時に、その人は一つの居場所を失うのにとどまらず、居場所全体を失うリスクに直面することになってしまいます。

たとえば、筆者の知るある元不登校の子どもは、学校に行かなかった時期も地域で活動している「子ども劇場」で友達に会えたのでそんなに寂しくなかったといいます。それに対し、学校に行かなければならないというプレッシャーのもとに、学校での友人関係や、ある程度の成績の維持に努め、学校を居場所として保つことに全エネルギーを使ってしまった場合には、学校以外の活動をするゆとりが残りません。結果としてほっとするような居場所感は実感できないまま時間も労力も学校に注ぐことになり、不登校になったあかつきには、どこにも行き場がなくなってしまうのです。

学校の「過剰居場所化」は、その場が「居たい」場であり「居られる」場である時には一見なんの問題もないように見えますが、どちらかの条件が失われた場合に、「どこにも居場所がない」状態を生む危ういものなのです。また、スクールカーストやいじめによって、学校における序列が人間としての序列のように位置づけられてしまった時に、その評価を相対化する手段をもたないという問題もあります。

家庭間格差や貧困の連鎖が問題になる中で、地域に多様なサードプレイスになるような居場所が必要であるという課題が共有され、2010年代に入ってからはいくつもの食堂や学習支援など、居場所づくりの取り組みが様々に広がっています。そこに居場所の多様化の可能性を見いだせます。しかし、同時に負の側面として、子どもの居場所が「そこにただある居場所」、子ども自身が創造する居場所から、「（大人によって）つくられる居場所」へと変化していることも見逃せないでしょう。

（阿比留久美『孤独と居場所の社会学』一部改変）

問一 空欄

I

 ・

II

 に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | |
|------------|--------------|
| I ア アジェンダ | II ア プライオリティ |
| イ アンチテーゼ | イ ライフスタイル |
| ウ コンプライアンス | ウ インセンティブ |
| エ アセスメント | エ アイデンティティ |

問二 傍線部A「居場所」が求められるようになった社会的背景について、本文中の語句を用いて四十五字以内で答えなさい。

問三 傍線部B「居場所を定義するための理論的枠組み」とあるが、居場所について述べた次のア～エのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 本人が主観的に承認する居場所では、他者との関係がない、あるいは希薄だからこそ落ち着くことができる。

イ 本人が主観的に承認する居場所と、第三者が客観的にその人が居るべき場所と承認する場所が一致することはない。

ウ 他者との関係がある居場所では、緊張と弛緩の両方を実現できるため、自分の存在が承認されるというメリットがある。

エ 空間性をもたない居場所は、オンライン上の空間や空想の世界の中で、現実世界とは異なる人間関係をもつことで形作られる。

オ 家族や友人関係は、家や学校という具体的な物理的空間を超えて成立するため、居場所とはいえない。

問四 傍線部C「21世紀の現代」において、空間性の有無について考えることが複雑である理由を本文中の語句を用いて五十字以内で書きなさい。

問五 傍線部D「アンネ・フランク」はユダヤ系ドイツ人であるが、次のア～オのうちから、ドイツを舞台にした文学作品を一つ選びなさい。

ア 銀河鉄道の夜

イ 雪国

ウ 斜陽

エ 舞姫

オ 夢十夜

問六 傍線部E「3つの空間」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア ファーストプレイスとセカンドプレイスはこれまで、生産的な場として人びとの生活に強い影響力をもっていた。

イ インフォーマルな社交の時間を削り、自分や家族に時間を費やすようになったことで、家族や職場での絆が強まった。

ウ サードプレイスは、産業構造が転換したことで弱まった地域社会のつながりを再構築するために提唱された考え方である。

エ 地域コミュニティでのインフォーマルなつながりは、ファーストプレイスやセカンドプレイスの不安定さを増すものとなっている。

オ インフォーマルな公共の集いの場や地域での社交は、多様な人との出会いや心の健康を維持することにつながる。

問七 傍線部F「居場所の選択肢」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 一人の人がもつことができる居場所の数には限りがあるため、それぞれの場所への依存度を調整しなければならない。

イ 居場所全体を失うリスクを避けるためには、特に拘束力（「居なくてはならない」性）の強い場所から退出する必要がある。

ウ こども食堂や学習支援などの取り組みは居場所の多様化につながる可能性がある一方で、子どもの居場所が「つくられる居場所」へと変化するという側面がある。

エ 学校における序列が人間としての序列のように位置づけられてしまった時に、学校への依存度が過剰に高まる。

オ 学校を居場所として保つことに全エネルギーを使ってしまった場合でも、学校に行かなくなれば、他の居場所を獲得・維持する余裕ができる。

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

現代に生きる私たちは多かれ少なかれ、科学的な世界観に染まっている。その世界観によれば、全ての出来事には原因がある。自然現象を例にとつて考えてみよう。木から一つのリングが落ちる。その原因はその直前に吹いた一条の風だ。そしてその風が生じた原因は、大陸と海上の温暖の差であり、さらにその温暖の差の原因は……と因果関係の連鎖は延々と続いていく。この世界で起こる全ての出来事は因果連鎖によつて結び付けられ、やがてビッグバンという宇宙の始まりの出来事にまでたどり着く。この世界の成り行きの全ては、ビッグバンから始まる長大な因果連鎖によつて連続的に、必然的に結び付けられているのだ。

この考え方に従うと、私たちの日常的な行為も自然現象と同様、因果連鎖の網の目に包摂された出来事にすぎない。あなたが友人を殴ってしまったとしよう。その原因はあなたが友人に抑えがたい怒りを感じたことである。そしてあなたが怒りを感じた原因は、友人にあなたの恋人を奪われたことであり、あなたの恋人を奪われた原因は……と、これまた因果連鎖が延々と続いていく。その因果連鎖をずっとたどっていけばいずれ、およそあなたの怒りとは無関係に思える出来事へと行き着くに違いない(「A」の故事を思い起こされたい)。

もしかしたらここで、こう考えたくなるかもしれない——私たち人間は、木から落ちるリングのような単なる物体と違って、自分の意志で行為し、それによつて因果連鎖からなるこの世界のありようを自分たちの力で変えることができる。ほら、いまだって私は落ちかけたリングを手で受け止めることができた。こうやって自然の因果の秩序に介入して変化をもたらすことができるのは私たち人間の特権であり、それがまさにX、と。

人間はこの世界の中で(右に述べた意味で)特権的な存在である、というのはたしかに私たちの偽らざる実感であるし、魅力的な考えだ。だがこの考えをきちんと正当化するのは、実は中々に難しい。まず、即座に次のような疑問が発せられるだろう——「ではなぜ私たち人間は、そして私たち人間だけが、この世界の因果連鎖から自由でいられるのか?」。この問いに対して、たとえば「靈魂」のような存在(世界の因果秩序に縛られない純粹に精神的な存在)を持ち出して応答しようとする方法は、あまりオススメできない。というのも、その答えは単に「非科学的」であるだけでなく、答えなければならぬ難題をむやみに増やしてしまいかねないからだ。その一例としてあなたは、「物理的な身体と非物理的な魂とはどのような仕方で結び付いているのか?」という、有名な哲学的問題に直面することになるだろう。

結局のところ、物理の教科書が教えてくれる次のような事実を認めなければいけないようだ——この世界の全ては分子や素粒子といったミクロな粒子から構成されている。テーブルも木も私たち

の身体も、そういった粒子の集合体であるという意味では違いがない。そしてそれら粒子のふるまいは、例外なくこの世界の因果連鎖に包摂されている。したがって私たちの行為もまた、因果連鎖を構成する一つのチェーンにすぎない。

以上のような科学的世界観（ときに「唯物論的世界観」などとも呼ばれる）は、私たちを「因果的決定論」という世界観へと導く。¹因果的決定論によれば、私たちの身の回りに起こる全ての出来事や私たちの行為は、直前に生じた出来事によって生じる必然的な結果である。言い換えれば全ての出来事は、その直前に起きた何らかの出来事によって因果的に決定されている。その因果関係はビッグバンにまで遡ることができるから、突き詰めればいまの世界の全状態はビッグバンが起きたときから因果的に決定されていたことになる。

因果的決定論は、かなり途方もない主張であるように思われる。しかし因果的決定論の厄介なところは、「そんな考えが正しいはずがない」と即座に切り捨てることが難しいことにある。というのも、Yからだ。例として次のような状況を考えよう。あなたの

愛車のエンジンが故障したので、腕のいい修理業者を呼ぶことにした。駆け付けた修理業者は綿密な検査を繰り返し、あなたにこう結果を報告する——「何度も調べてみたのですが、残念ながらエンジンの故障の原因はどこにも見当たりませんでした。私が思うに、このエンジンの故障にはそもそも原因がなかったのです。つまりエンジンの故障は、何か別の要因によって引き起こされたのではなく、いわば無から生じたのです」。あなたはこの業者の弁解を聞いて、きつこう思うのではないだろうか——「そんなはずはない、エンジンの故障には本当は原因があるのだが、業者がそれを見つけることができなかっただけだ。おそらくもっと慎重な精査を施したなら、その原因を見けることができただろう」と。そう思うならばあなたは十分に科学的世界観に染まっている。全ての出来事には原因があるという世界観を、私たちは自然に、そして無意識のうちに受け入れているのだ。

ここで、一つの重要な疑問に触れておくことが賢明だろう。現代物理学に通じた読者は、「量子力学の標準的な解釈によれば、素粒子のようなミクロな物体のふるまいは原理的に確率的であるから、因果的決定論は間違っているのではないか」と考えるかもしれない。これはもっともな指摘だ。実際、現代の理論物理学者の多くは、この世界を「非決定論的」だと考えているようである。

とはいえ、このことから「自由と決定論などという問題は虚妄にすぎないのだ」と即断するのはBだろう。まず、（少数派であるとはいえ）量子力学の標準的解釈に反対して、いわゆる「多世界解釈」と呼ばれる量子力学の決定論的な解釈を提案する物理学者も存在する。また、より重要な点だが、仮にこの世界がミクロレベルでは決定論的でないとしても、私たちの身体のようなマクロな物体は決定論的にふるまうということは十分に考えられる。もし私たちの行為やふるまいが全て過去の出来事によって決定論的に引き起こされているのだとしたら、仮にミクロレベルで非

決定性が見出されるとしても、マクロレベルでの近似的な決定論が私たちの自由にとって脅威となることは明らかだろう。その限りで、「自由と決定論」の問題の意義と重要性は残り続けるのである。

ついでに述べておけば、世界の非決定性——つまり、物事の生起が決定されているのではなく、ランダムにすぎないということ——もまた、私たちの自由に対する脅威となりうる。私たちのなすことがランダムな過程からの偶然の結果にすぎないのだとすれば、いかにしてそれを自由だと言えるのだろうか。これは決定論とは独立の観点からの問題であり、真剣な考慮に値する。

ここまで議論を進めてきて、読者の中には次のように考える人がいるかもしれない。「たしかに私たちの行為は必然的な因果連鎖の結果だから、私たちが自由になしていると思っている行為は実は全て決定されている。よって私たちの自由は幻想にすぎない。だが、それで何の問題があるのだろうか？ テツガクシヤたちの言う「自由」なんてそんな大事なものののだろうか？」。要するに自由なんてあってもなくても変わらないのだから、考えるだけムダだ、というわけだ。これはいわばニヒリスト的な開き直りだが、立派な一つの哲学的立場であり、考察に値すると思う。この立場を（自由の）ニヒリズムと名づけ、もう少し詳しくこの立場の主張について考えてみたい。

ニヒリズムの主張が正しいかどうかを評価するために、「自由」という概念が私たちにとって重要なものなのか、という問いについて考えよう。そのためには、自由が全く存在しない世界を想像してみるが良い。まずは例として次のような事例を考えてほしい。ある青年が法廷で強盗殺人の罪に問われている。そこでその青年の弁護人が次のような弁護を展開する——「被告が殺人を犯したことは、彼の遺伝子配列や育った家庭環境その他の要因によってあらかじめ因果的に決定されており、彼は殺人を犯すことを避けることはできなかった。そうであるならば、彼に罪科を問うことは不当である。なぜなら、彼が罪を犯すことがあらかじめ決まっていた以上、その犯罪が生じたことは彼のせいであるとは言えないからである」。

この弁護人の陳述は C にすぎない、と思われるかもしれない。だがここで指摘したい重要な点は、ニヒリズムの主張がまさに、右の弁護人が持ち出した論理を導きかねない、ということである。他者を非難する場合についていま一度考えてみよう。他者をその人のしたことで非難するときふつう私たちは、その人が自由な主体であることを前提している。もしその行為が当人の自由でなく、たとえば他の誰かに強制されてなされたものだとしたら、私たちはその行為者を非難の対象にはしないだろう。また極端な例で言えば、私たちは台風が大災害をもたらしたとしても、台風を（普通の意味で）非難したりはしない。台風のような自由を持たない自然現象は本質的に、「非難」という道徳的評価の対象にはなりえないのだ。だが因果的決定論を根拠に私たちの自由のリアリティを捨て去ってしまうことは、台風のような自然現象と私たちの日常の行為との区別の一切をなくしてしまうことを帰結しかねない。その結果、他人の行為を非難したり、その行為の結果に応

じて責任や罪を帰したりするといった社会的、道徳的な営みの正当化がきわめて困難になるのである。

また、他者を非難したり罪を帰したりする場合と同様、称賛されるべき行為や業績に関しても類似の問題が生じる。ある物理学者が新しい素粒子の発見によってノーベル物理学賞を受賞したとしよう。その授賞式の席で、自由のニヒリズムを信じる記者が次のような質問をする——「たしかにあなたの発見は物理学に新たな進展をもたらす偉大なものであるかもしれませんが。ですがあなたがこの発見をしたことは、あなたが生まれた瞬間から決定されていたことです。それならば、あなたがノーベル賞を受賞したことも、単に運が良かっただけではないのでしょうか？」。

この失礼な記者の思想は極端に映るかもしれないが、これもまさにニヒリズムが受け入れなければならない帰結であるように思われる。私たちが他者の行為を称賛する場面を想像してほしい。私たちが他者の行為——たとえば電車でお年寄りに席を譲るといった行為——を称賛するのは、その行為がその人によって自由になされたときに限る。もしあなたが誰かに強制されて仕方なく席を譲ったとしたら、私たちはあなたの行為を称賛したりしないだろう。

ここまでの考察から、自由のニヒリズム、ひいては「なぜ自由なんて論じる必要があるのか？」という疑問に対するさしあたりの応答の方向性が明らかになる。他者の行為を称賛したり非難したり、行為の結果に対する責任を帰属したりといった営みは、私たちの社会的生活の基盤をなしているものだ。しかし、ニヒリズムのように私たちの自由を否定することは、私たちのそういった営みの意義を全て捨て去ってしまいかねない。言い換えれば、私たちが自分のしたことに責任を負い、他者のしたことを称賛したり非難したり、法廷にかけて刑事責任を問うたり、といった諸々の営みが成立するためには、私たちが自由な主体であることが必要不可欠なのである。だからこそ、哲学者たちは、私たちは自由ではないかもしれないという疑問を真剣にとり、自由と決定論の問題と真摯に向き合ってきたのである。

もつとも、自由を否定することによって、右で示唆したような悲劇的な結末を私たちの社会が迎えることになるという見解に対しては、実は異論が存在する。自由についての懐疑論——右記のニヒリスティックなアイデアを理論化した哲学的見解をこう呼ぼう——の中には、仮に私たちの社会から「自由」やそれに関連する様々な実践を取り払ってしまったとしても、私たちの社会が直ちに無秩序なディストピアになってしまうとは限らない、と主張する者もいるのだ。この種の見解は懐疑論の中でも楽観的懐疑論と呼ばれ、盛んに議論されている。

（高崎将平 『そうしないことはありえたか？ 自由論入門』 一部改変）

問一 空欄 A C に入るものとして最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

A ア 柵^{わざわい}を転じて福と為す B ア 自然

イ 風が吹けば桶屋^{おけ}が儲^{もう}かる イ 秀逸

ウ 木に縁^よりて魚を求む ウ 性急

エ 瓢箪^{ひょうたん}から駒が出る エ 慢心

C ア 詭弁^き

イ 曲解

ウ 迎合

エ 釈明

問二 空欄 X に入るものとして最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 私たちがつい陥りやすい落とし穴なのだ

イ 私たちと科学的世界観とをつなぐ結び目なのだ

ウ 私たちが世界とうまく共存しているということなのだ

エ 私たちの意志の力の強さを証明しているのだ

オ 私たちが自由であることの根拠なのだ

問三 傍線部「因果的決定論」について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア ある出来事から必然的に別の出来事が生じるといふ因果的決定論では、人間の行為は説明できない。

イ 因果的決定論を客観的に正しいと判断するには、ビッグバンの仕組みを解明することが必要である。

ウ 現代物理学の理論に従えば、因果的決定論は非科学的であり間違っていると結論付けられる。

エ 因果的決定論によれば、私たちの行為は全て必然であり、究極的には宇宙の始まりにまで遡ることになる。

オ 全ての出来事には原因があるととらえている私たちにとって、因果的決定論を退けることは容易ではない。

問四 空欄

Y

に入るものとして最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 私たちは因果の連鎖の中の一つのチェーンであるという科学的世界観は正しいと私たちは教わってきた

イ 私たち人間は特別な存在であるという実感と、科学的世界観とは相容れないものだと言わざるを得ない

ウ 因果的決定論の背景にある科学的世界観は、私たちの日常的なものの見方にあまりにも深く浸透している

エ 一般的・基礎的な教育を受けてきた私たちにとって、科学的世界観における物理法則への信頼は揺るぎない

オ 因果的決定論を導く科学的世界観は、私たちにとって自明のことであり、これを否定することは自分自身を否定することに繋がる

問五 傍線部2「(自由の)ニヒリズム」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア ニヒリズムは、因果的決定論とは反対に全ての物事は偶然の産物であると考える立場だが、私たちが自由ではないと結論づけるところは因果的決定論と同じである。

イ ニヒリズムでは、ある出来事が起きるかどうかは確率の問題であるとして、この世界の状態も私たちの自由も、物事が起きてからでないと決まらないと考える。

ウ ニヒリズムはある意味では楽観的であり、もし私たちに自由がないとしても私たちはすぐにそれに慣れ、不自由さを前提とした社会ができあがるとしている。

エ ニヒリズムでは、私たちが自由であろうがなかろうが現実の世界にとってはどうでもいいことであり、自由を問題にすること自体が無意味であると考ええる。

オ ニヒリズムは、そもそも私たちが自由であると感じることが幻想であると主張し、その幻想の行く末はディストピアであると論じる。

問六 傍線部3「『自由』という概念」が私たちににとって重要だといえるのはなぜか。七十五字以内で答えなさい。